

飛翔

第 2 号

平成20年9月20日発行
発行
東大津高校 飛翔会
印刷
(有)シンコー印刷

『第2号飛翔会会報発刊によせて』

滋賀県立東大津高等学校
飛翔会会長

平井 嗣晃



例年にも増して残暑の厳しい今年の夏ですが、皆様ご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。平素は飛翔会の活動に対しご尽力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、創立30周年記念事業を行ってからはや4年が過ぎました。4年に一度のオリンピックイヤーに合わせ、飛翔会も総会開催及び会報を発刊することに決め、今年には会報の第2号を発刊させていただきます。母校のことは普段の生活の中ではあまり思い出すことはないかもしれませんが、今回の会報をご覧いただくことで少しでも若かった(?)高校時代を懐かしんで頂けると幸いです。

秋には総会の開催も予定しております。多くの方のご出席をお待ちしています。最後にになりましたが、会報発刊にご尽力いただきました諸先生、役員の皆様に心からお礼を申し上げます、第2号発刊の挨拶とさせていただきます。

「学校力」を感じる場面

学校長 鷹羽 強



夏休みに入っすの7月19日、高校野球夏の大会、三回戦、東大津対瀬田工業が皇子山球場で行われました。本校の応援席には、制服を着用した百人以上の生徒が集まり、一年生野球部員のリードにより、野球部保護者会の皆様方と一体となった応援を最終回まで熱心に繰り広げました。試合は、立ち上がりで失った六点を追って、執拗な追い上げを見せました。野球部員の、決して試合をあきらめず、一歩一歩追いついていくというねばり強い試合運び

と、戦っている選手の心を支える熱のこもった整然とした応援は、学校が一つの集団として団結し、目標に向け邁進していく力強さを感じました。試合結果は惜しくも5対7で破れはしましたが、東大津高等学校の学校としての力、「学校力」と表現してもいいそんな素晴らしい力を感じる試合でした。

東大津高校の現在の状況を如実に物語る野球の試合の話をしましたが、「学校力」を感じる場面は、日常の学校生活でよく見られます。学校が一つになって、希望進路の実現に向け勉学に真摯に取り組むことは勿論、部活動や特別活動を通じて、コミュニケーション能力を高め、人のために尽くす喜びを感じて人間としての成長を図っていく、このことが本校の使命であり、この伝統をいつまでも大切にしたいと思っています。先輩諸兄のより一層のご指導、ご鞭撻をお願いいたします。

「耐寒遠足」誕生 北村 清之

(野球部の創部・開校から第9期まで本校勤務)



治雄校長を始め、年齢を感じさせない健脚が揃っていたことが災い(?)したのかも知れない。

昭和51年1月23日、滋賀県立体育館では日教組の全国教研集会が開催されることになった。約1万名の参加者と大音響の街宣車が予想される中で、当時、隣のプレハブの仮校舎で二年6クラスだけの学校として産声を上げたばかりの東大津高校では、その日の授業をどうするか喧々囂々の論議が交わされていた。そうした中で浮上してきたのが、「遠足を兼ねて瀬田の丘陵に建設中であつた本校舎を見に行こう」という案であつた。初代の山本

を迎えた当日、石山駅に集合。鹿跳橋を渡って田上に入り、柴原から山の中を潜り抜けて校舎らしきえらく細長い建物の横に出てきた。周りには何も無く、グランドと思しき所はぬかるみ状態。しばらくそれをじつと眺めた後、四月からここで生活することになった不安を感じながら瀬田駅で解散した。まさかこれが東大津高校の名物行事「耐寒遠足」として発展・成長(?)し、今日まで綿々と引き継がれてくるとは...